

建久六年民部卿経房家歌合の詠歌表現について

安井重雄

はじめに

建久年間の歌壇は良経を中心とした九条家の活動が活発で、歌合に限っても、建久元年（1190）九月花月撰歌合（俊成判）、同二年十月後京極家歌合（俊成判）、同四年秋六百番歌合（俊成判）、同五年夏名所十題歌合（判者未詳）、同五年仲秋南海漁父北山樵客百番歌合（判者未詳）等が、主に俊成を判者に招いて催されている。周知のように九条家歌壇は、御子左家歌人と六条家歌人が競合しながら、俊成門下の若手歌人によって新古今集の新風に繋がる歌風が醸成されており、特に六百番歌合からは新古今集に三十四首もの撰入歌を提供することになる。

しかし、一方では、平安末期のいわゆる風情主義の中で

詠歌し続ける歌人たち（本稿においては「旧風歌人」と称する）も活躍しており、建久年間前後に九条家以外でも、文治二年（1186）経房家歌合、建久二年若宮社歌合（顕昭判）、同六年経房家歌合、正治二年（1200）石清水若宮歌合（通親判）等の歌合が催されている。中村文はあえてこれら良経家以外の催しに注目し、「新古今集との関連が薄く、文学史的な意義も低い催しと見做された」、「だが、平安末期の歌界と所謂新古今歌壇とがどう連続／断絶するのかを考察し、新古今時代を和歌史の中に正確に定位させるためにも、これらの催しについての検証は必須である」と問題を提起し、最近では「平安末期の（風情）を追究する歌人たち」の試みに「（新古今歌風）の萌芽」が認められると論じた。^②

本稿で取り上げる建久六年（1195）正月二十日民部卿経房

家歌合は、六百番歌合が催されてからおおよそ一年後の開催であり、この時期に良経家以外の歌合でどのような詠歌が提出されていたのかを知るためには重要な歌合といえる。当該歌合は俊成による跋文を有し、その言説の一部が『古来風躰抄』『慈鎮和尚自歌合』十禅師跋に再説されることで注目されてきた。しかし、その詠歌や判詞は俊成歌を中心に部分的に取り上げられるだけで（初郭公二十三番・深雪二十番・久恋二十三番等）、当該歌合全体については十分に検討されているとはいえない。唯一全体を視野に入れるのは松野陽一の研究で、跋文末尾の「たかまの山のたかきおほせのときははゝかりの関のはゝかりをなし」云々の記述及び、深雪二十番の「雪のあけほの」をめぐる判詞、久恋二十三番判詞に注目し、俊成は判者として「六百番歌合の折には、憚りと恐れがあつて、思うこともいえなかつた」、「良経定家らの新風の行き過ぎへの批判が、表立っていえぬことを含み、他方で六条家学への再批判の機会としようとする意図を秘めていたことが、判詞によつても知ることができるのである」と指摘し、「結局、この歌合の判詞と跋文とは、建久期の主要舞台であつた良経家歌壇での成果を、やや距離をおいたところから計測する為の支点

となるという意義と、古来風躰抄の様々な点での下敷になつてゐるという意味において、特に資料的価値をもつてゐるように思われるのである」と結論づけた。松野の指摘は、判者を務めた俊成の立場を重視してなされたものだが、当該歌合の詠作全体を視野に入れると、「六条家学への再批判」という点はそれほど強いものとは思われず、「良経定家らの新風の行き過ぎへの批判」という点についても本稿において以下に述べるように、もう少し補足できるものと思われる。

以下、本稿では、俊成判詞も若干参照しながら特に詠歌表現を考察することにより、当該歌合の意義について考えてみたい。

なお当該歌合について形式的な側面を述べておくと、主催者は吉田経房で、文治二年十月に続いての歌合開催である。歌題は、山花・初郭公・暁月・深雪・久恋という四季各一に恋を配した五題で、各二十三番とし、計百十五番の規模である。歌人は経房を含めて四十六人。判者は、文治二年度の歌合では衆議判として判詞執筆者を六条家の季経としたが、今回は母方の叔父に当たる俊成に委嘱している。結番の合手は各題固定し、一番左に主催者経房を、末尾

二十三番左に判者俊成を据えており、俊成を遇する形を取っている。歌合開催の理由については知られない。冒頭「山花」題の二番左歌「みかさ山嶺の朝日に桜花さしてぞしるき万代の春」(親宗)、四番左歌「春日なるみかさの山の花桜いくよろづよのかざし成らん」(兼光)に祝意が詠み込まれ、判詞にもその点について言及があるが、それ以外に祝意を込める詠は見えず、取り立てて何らかの慶賀が存したわけではなさそうである。

一 出詠歌人及び、他出資料への入集状況

まずは、当該歌合の全体像について、出詠歌人と撰集への入集状況から捉えておこう。

出詠歌人を、左方・右方に分けて、松平文庫本の冒頭の作者一覧に従って位署とともに掲げたのが【資料1】である。

【資料1】出詠歌人

*◎||現任公卿 ○||非参議 ▽||女性 △||僧侶 □||『新古今集』に五首以上入集する歌人。

*歌道家の歌人は↓を付して、六条家は「六」、御子左家は「御」と記した。

左方

- ◎権中納言兼民部卿藤原経房卿
- ◎権中納言平親宗卿
- ◎権中納言兼左衛門督藤原隆房卿
- ◎権中納言藤原兼光卿
- ◎参議左近衛権中將藤原公時卿

右方

- ▽殷富門院太輔
- △沙弥生蓮 師光
- ▽中宮讃岐
- ▽二条院三河内侍
- ▽関白家丹後

◎参議右近衛權中將藤原公繼卿

○正三位藤原季能卿 前右京大夫

○從三位藤原季經卿 前宮内卿

○從三位藤原經家卿

左京大夫藤原顯家朝臣

左近衛權中將藤原兼宗朝臣

右京大夫藤原隆保朝臣

右中弁藤原定經朝臣

散位藤原有家朝臣

散位源定宗朝臣

權右中弁藤原宗隆朝臣

治部少輔藤原為季

中務太輔藤原保季

摂津守源長俊

片岡欄宜加茂重政

△沙弥性照（平康頼）

△興福寺權別当法印範玄

△皇太后宮太夫人道釈阿

↓御

↓六

↓六

↓六

↓六

↓六

右近衛權少將藤原成家朝臣

△阿闍梨顯昭

△沙弥寂蓮

△右大臣法眼実快

△僧祐盛

左近衛權少將藤原定家朝臣

散位藤原伊綱

左衛門權佐藤原朝經

前越中守藤原家隆

皇太后宮亮藤原有經

左少弁藤原資実

前播磨守藤原隆親

侍從藤原実宣

△僧靜縁

前大和守源光行

△沙弥見仏（藤原親盛）

右京權大夫藤原隆信朝臣

△少納言法印靜賢

↓御

↓御

↓御

↓御

↓六

↓御

左方は、現任公卿と非参議以下、当時の位階に従って一番より配置し、末尾の二十〇二十三番には神官と出家者を置く。右方は、一番〇五番が女房と僧侶、六番に俊成息成家を配した後、七番〇十番まで僧侶、十一番〇十八番に中流官人、十九番〇二十三番に僧侶と官人を交互に配し、末尾二十三番は法勝寺執行でもあった静賢を置いている。歌道家歌人は、六条家が主に左方（僧侶である顕昭のみ右方）に配されて重んじられた格好となり、御子左家歌人は判者である俊成以外は右方に置かれている。両家の對抗関係を一応考慮に入れたと思われるが、結番の合手となっているのは八番「季経・寂蓮」・十四番「有家・家隆」だけであり、直接的な対立を避けている。僧侶のうち範玄を左方に置いたのはその僧綱によるのだろう。性照を左方に置いたのは見仏との結番を考慮したためであろうか。なお女流はすべて平安末期から活躍してきた高齢の歌人であり、讃岐・丹後は兼実家に仕えていて新風にも接していたと思われる。当該歌合の翌二月には良経家女房百首（女流八名）が披露されており、大輔・丹後はそのメンバーに入ることが明らかで、讃岐・三河内侍も入っていた可能性が高い。つまり、この四名は良経に評価されていた女流である。

このように、公卿を中心として六条家歌人を有する左方に對し、右方は女流（四名すべて右方）・僧侶（十一名中右方八名）を中心に御子左家歌人を配しており、対照的な配置が見て取れる。

出詠歌人四十六人のうち、左方の公継、保季、右方の三河内侍、丹後、実快、朝経、家隆、資実、静縁以外は、良経家以外の主立った歌合である治承二年別雷社歌合、文治二年経房家歌合、建久二年若宮社歌合への出詠歴がある。また、六百番歌合出詠歌人十二人のうち良経・家房という二人の貴顕以外の十人が当該歌合に出詠しており、良経家歌壇の情報を知る作者がそれなりの人数出詠していることになる。なお新古今集に五首以上入集する歌人を□で囲んだが、三人の女流と有家及び御子左家歌人である。

次に当該歌合歌二百三十首の他出状況を、①勅撰集、②私撰集・私家集等に分けて、【資料2】に一覧しておく。

【資料2】勅撰集・私撰集・私家集等入集状況

*例えば、「新古今集 98（秋上435・讃岐）」は、経房家歌合98番歌が新古今集・秋上435に入集し、作者は讃岐であることを示す。また、「寂蓮集 16（143）」は、経房家歌合16

番歌が寂蓮集143に入集していることを示す。

①【勅撰集】計一二首。讃岐三首、成家二首、兼宗二首、

寂蓮一首、季経一首、公継一首、資実一首、隆房一首。

8新古今集

98 (秋上 435・讃岐) 190 (恋四 1286・讃岐)

9新勅撰集

113 (秋下 288・兼宗)

10続後撰集

15 (春中 72・季経) 32 (春中 102・資実)

11続古今集

189 (恋五 1380・隆房)

18新千載集

6 (春上 95・讃岐) 12 (春下 118・成家)

21新続古今集

21 (春下 112・兼宗) 57 (夏 219・公継)

②【私撰集・私家集等】*歌枕名寄、題林愚抄は除く。

定家八代抄

98 (秋上 313・讃岐)

三百六十番歌合

21 (77・兼宗) 74 (夏 191・家隆)

106 (366・顕昭) 190 (654・讃岐)

194 (652・丹後)

万代集

15 (春下 263・季経) 32 (春下 260・資実)

57 (夏 598・公継) 191 (恋二 2010・兼光)

215 (恋三 2350・宗隆)

別本和漢兼作集

32 (166・資実) 191 (152・兼光)

和漢兼作集

215 (161・宗隆)

閑月集

45 (春下 87・俊成) 150 (冬 328・成家)

雲葉集

189 (恋五 1016・隆房)

夫木抄

189 (941・隆房)

重家集

155 (409)

寂蓮集

16 (143) 62 (144) 154 (145)

壬二集

28 (2125) 74 (1899) 120 (2466) 166 (2660)

隆信集

44 (55) 90 (103) 182 (290)

拾遺愚草

68 (2204)

公時集^⑨

147

源承和歌口伝

202 (135・実快)

まず勅撰集については、新古今集に二首以下、計十二首が入集している。この歌数は、文治二年経房家歌合が新古今集に○首、勅撰集全体で六首入集、^⑩建久二年若宮社歌合が新古今集入集に○首、勅撰集全体でも○首という入集状況であったのに比べると、当該歌合歌は良経家以外の催しの中では評価されているといえよう。ただし、撰歌された

歌人をみれば、新古今集の二首はいずれも讃岐歌であり、新古今集の主要歌人である俊成・定家・家隆・有家・寂蓮らの歌はこの歌合からは採られていない。主要歌人は勅撰集全体では、寂蓮歌が新統古今集に一首採用された程度である。つまり、当該歌合は新古今時代の主要歌人以外の歌を撰歌する資料に止まっているといえるのである。このことは、当該歌合における新古今集主要歌人の歌が彼らの詠歌の中ではそれほど優れた歌ではないことを示唆していると思われる。私家集に目を移すと、俊成の家集は当該歌合を撰歌資料としていなかったと思われるが、寂蓮集が三首、壬二集が四首（ただし、壬二集は他撰家集）、隆信集が三首、拾遺愚草が一首という入集状況である。特に拾遺愚草が一首のみというのが目を惹くが、定家の当該歌合における自詠への評価の低さが表れているとみられる。この点は後述するが、家隆などはそれなりに工夫した詠歌を提出していると思われるものの、定家は六百番歌合にみられた過度の新風表現をかなり抑えた詠歌を提出しているように思われる。

右のように、俊成門下の新風歌人が概して低調な表現に止まっているとみられるのに対して、中宮任子に仕えてい

た讃岐に新風の工夫がみられるなど、良経家以外で活動してきた歌人たちに秀歌を得るべき工夫がみられると思われるのである。

二 旧風歌人たちの詠歌―新風への傾斜

前節に見たように、当該歌合には平安末期から歌作を続ける歌人、六条家歌人、良経家歌壇で活躍する新風歌人らがともに出詠している。まずはいわゆる旧風歌人たちの詠歌がどのようなものであるかについて、見ていきたい（以下、掲出歌には歌頭に私に①等の数字を付し、判詞については必要な範囲で引用する。傍線も私意による。作者名の下に算用数字は当該歌合の新編国歌大観番号）。

① 一つのまに花の白雪つもるらんかぶろに見えし山のいたゞき（山花三番・左・隆房5）

左歌、山かぶろなるなど云事はあるうへに、いつのまに雪つもるらむなどもをかしくは侍れど、戯事なるやうにぞ侍べき、……

② 花みればうきをわする、春ごとに山つくりせむ神ぞ嬉しき（山花十番・右負・祐盛20）

……右歌上句はこともなく待を、下の句あまりの
ふる事思へるやうにや侍らん、……

③ 歎きつ、としへぬる身をしたひきて恋さへ鳩の「杖」
はつきけり（久恋二十番・左・重政223）

左歌、恋の鳩「杖」つける事、思ひかけぬ風情に
やあらん、……

① 隆房歌は、花の白雪が山の頂に散り積もった様子を禿
げ山すなわち「かぶろ」と奇抜に見立てたものだが、和歌
に「かぶろ」を用いた最初の例かと思われる。^①ただし、こ
のような「かぶろ」の用法は、黒川本色葉字類抄に「禿^{カフ}
^{リ頭}童^同山^山木^木也」とあつて院政期には一般的にみられた用法
であつたと思われ、その見立てを和歌に用いたのである。

② 祐盛歌は、山を造った神に思いを致し、「山つくりせむ
神」（他本は「山つくりけむ神」と表現した一首である。

「山（を）つくる」は、後に基家（夫木抄¹⁷⁰⁸、柿本影供百
首）らの用例があるが、和歌に用いたのはこれが初例である。

③ 重政歌は、やはり和歌ではこれが初例と思われる
「鳩の杖」（老人の用いる、頭部に鳩形を刻んだ杖）を用い
て「久恋」題を満たそうとする。^③①③はいずれも俗語・
奇語を和歌に用いることで趣向を構築しようとする歌であ

り、いわば院政期以来の旧風の詠歌方法といえよう。
しかし、旧風歌人にも次のような俗語・奇語に拠らない
歌がある。

④ いつしかと声ならずなり時鳥昨日かへりし春にちが
ひて（初郭公二十番・左負・重政85）

左歌、春にちがひてなどいへる、さまでならぬ詞
をちかき世つねに聞やうに侍れど、はじめたる
こゝろはあるべし……

⑤ 名にたてる秋もかひなしあたら夜の月を残してあく
るしの、め（暁月一番・右持・大輔94）

……右歌、下句はよろしく侍を、秋もかひなしと
いへる、しかるべからずきこゆ……

⑥ あかでいりし夜なくよりもつらき哉月を残してあく
る山のは（暁月二十二番・右持・隆信136）

……右のうた、又下句に月をのこしてあくる山の
端といへる、心いとおかし

⑦ ながむれば心もきえぬ古郷の軒ばにかゝる有明の月
（暁月九番・右負・実快110）

……右歌、のきばにかゝるらん有明の月も心いう
には侍を、心もきゆらんやいかにぞ侍らん、……

④「春にちがひて」は、郭公がまさに春と行き違つて初夏に鳴き出す様子を表現したものである。「にちがひて」は、「中中に月にちがひて行く雲はくまなきよりもうれしかりけり」(出観集365)、「かは岸のふねにちがひてのぼるかなこれやはやせのみするなるらん」(成通集68)、「帰る雁にちがふ雲路の燕めこまかにこれやかける玉章」(西行法師家集30)等、平安末期に使用され出す表現であるが、物と物とが交錯する動的な場面の構成を志向しており、新風にも繋がる表現であると思われる。ただし、④のこの表現を俊成は「さまでならぬ詞をちかき世つねに聞」と批判しているが、それは「無名抄」「近代古体」に「いはゆる『露さびて』『風ふけて』『心の奥』『あはれの底』『月の有明』『風の夕暮』『春の古里』など、はじめ珍しくよめる時こそあれ、二度ともなれば、念もなき言辭どもをぞわづかに学ぶめる」と批判的に掲げる新風の詞遣いに通じるものを感じ取つたためであろう。それでも、「春」に「にちがひて」を接続することで歌題の「初」が表現できたことは評価している(「はじめたるこゝろはあるべし」)。⑤⑥「月を残してあくる」は、「たぐひなくつらしとぞおもふ秋のよの月をのこしてあくるしのめ」(千載集・秋上300・成通、

続詞花集・秋上178)を学んだものであろう。成通歌は続詞花集に入集することから、永萬元年(1165)以前の詠作である。大輔・隆信は「月をのこしてあくる」という措辭に新風に繋がる要素を感じ取つて採用したものと思われる。後に良経は「月をのこして」を用いて「あたらのながめし花に風ふけば月をのこしてはらふしらくも」(仙洞十人歌合27・良経)等と詠じている。⑦「軒ばにかゝる」は、祿子内親王家歌合(歌合大成一九〇)・出雲歌「花すすきのきばにかかる白露をやがてきえせぬ玉かとぞみる」(七番石・露14)が早く、その後家隆の「軒ばにかかる雲」という例(壬二集108・後度百首)があり、当該歌合の定家「しのびすむ心もたへず山かげや軒端にかかる松の雪をれ」(深雪十一番・右持)及び実快の用例が現れる。良経は千五百番歌合において定家歌下句をほぼそのまま用いて「山ざとはいくへかゆきのつもるらのきばにかかる松のしたをれ」(九百六十二番・左勝1922)と詠じるなど「軒端にかかる」の措辭は新古今新風に繋がるものと評価されていたようだ。なお月が軒端にかかると表現したのは実快が最初である。

右に見たように、平安末期から詠歌を続ける歌人たちは、

平安末期和歌の既詠の表現の中から良経家歌壇で試みられている新風和歌の表現に繋がるものを探し出して、自らも試みている様子が知られるのである。

さらに、良経家歌壇の新風表現を直接的に摂取した例がある。

⑧思ひねの夢にはなれき郭公うつ、はこれぞ初音也ける（初郭公十八番・左・保季81）

左歌、すがた心おかしくは侍を、夢にはなれきといへるや、そでうちかはしなどやうにやき、なされ侍らん……

⑨露もろきをの、しのはら風ふれてやどりもあへぬ有明の月（暁月二十一番・右勝・見仏134）

……右、露もろきとをきて、やどりもあへぬ有明の月と云る、よろしくこそ侍めれ、……

⑧「思ひねの夢にはなれき」は、表現の近さから考えて、文治五年早率露胆百首の定家歌「おもひねの夢にもいたくなれぬれば忍びもあへず物ぞかなしき」（拾遺愚草472）を学んだと考えられる。⑨「露もろき」は慈円の建久三年九月住吉百首「すみの江の島のむら萩露もろししばしな吹きそまつのうら風」（拾玉集1578）が初例であり、見仏はそれ

を学んだと考えられる。また「風ふれて」は崇徳院歌（和歌一字抄1175）が初例で、定家が建久元年花月百首に「桜花ちらぬ梢に風ふれてる日もかをる志賀の山越」（拾遺愚草605）と詠じている。「露もろき」「風ふれて」「やどりもあへぬ」（なお「やどりもあへぬ」はこれが初例）と続けることで、月が露に宿ろうとするも風のせいで露が散って宿ることができない一瞬の様子を捉えている。⑧⑨が参照したこれら良経家歌壇の詠作はいずれも私的な場で詠じられたものだが、歌人たちは良経家歌壇における私的な詠作の情報までも積極的に手に入れて、その新鮮な詞を間髪を入れずに当該歌合で模倣しているのである。

しかし、歌人たちは単に模倣するだけでなく、良経家歌壇の表現を参照しながら、新たな工夫を加えようとしている様子がみられるのである。たとえば、「山花」題における、花を雲に見立てることを前提に「雲」に接続する動詞を工夫した表現を挙げてみたい。傍線を付した箇所がそれである。

⑩風かほる花のあたりにきて見れば雲もまがはず三吉の、山（山花三番・右勝・讃岐6）

……右歌、風かほるとをけるより、すがた詞いう

なるべし、勝とすべし。

⑪ 花かともおどろく人やなかるらん雲になれたる小泊
瀬の山（山花五番・右勝・丹後10）

……右歌しものくなどよろしく侍れば、右為勝。

⑫ 春風にこずゑははれてよしの山花の雲しくいはのか
け道（山花七番・左勝・季能13）

左歌、偏にちりはてたる歌にぞ侍れ「ど」、花の雲しくなどいへるすがたよろしくみゆ、……

⑬ 高砂の尾上の花に夜をこめて雲にふしたる明ほのの
空（山花十九番・右勝・静縁38）

……右歌、尾上の花に夜をこめて、といへる、又よろしく侍るを、ふしたるの詞やいかにぞ聞え侍れど、……あけぼの、空まさると申べくや

⑩ 「雲もまがはず」は、吉野山の雲を花かと推測してやつて来ると、雲と見紛うこともないすばらしい桜であったことを表現したものである。良経の詠作年次未詳歌「春はなほ心あてにぞ花は見しくもまがはぬみよしのの月」（秋篠月清集¹²¹）があるが、それを除けば当該讃岐歌が初例である。以後、続拾遺集（春上60）に入る建保四年後鳥羽院百首の雅経歌等に用いられる。⑪「雲に馴る」は、他

に後の澄覚法親王集39に一例のみ見える表現で、当該歌が初例である。⑫「雲しく」は慈覚大師円仁歌（続古今集・釈教75）があるが、直接参照されたのは良経の建久二年（1191）十題百首詠「よしのやまくもしくにはいとどちてうきよをきかぬかせのおとかな」（秋篠月清集21）であろう。ただし、「花の雲しく」は他に用例のない季能の工夫である。⑬「雲にふしたる」は、覺性に「月影はくまなきものを尋行く人はいづくの雲にふすらん」（出観集417）との用例があるが、おそらく良経の建久元年二夜百首「くもにふす人の心ぞしられぬるけふをはつせのおくのやまぶみ」（秋篠月清集187）を参照したものかと思われる。

このように、旧風歌人たちは、平安末期の詠作や良経家歌壇の新風和歌を参照しながら新風として適切な表現を探索し、新しい詞統きの工夫も行っていることが確認できるのである。なお、判詞を見ると、⑩⑪⑫については評価しているが、⑬「雲にふしたる」については批判している。俊成は、旧風歌人たちによる新風表現の工夫を目にしてそれを子細に検討しながら、基本的には評価していると見られるが、④「春にちがひて」、⑬「雲にふしたる」など「いりほが」に陥りそうな表現を選別して批判しているのであ

ろうと思われる。

三 後鳥羽院歌壇における 当該歌合の表現摂取

前節のように、旧風歌人たちが新風表現を参照しながら新たに工夫して見いだした詞続きを、逆に、新風歌人が採用する例があり、注目される。

⑭見渡せばこほりしきつのうらさびて浪まにきゆる有明の月（暁月十七番・左持・為季¹²⁵）

左、心すがたよろしくはみゆるを、有明の月はなみのうへにも猶のこさまほしかりける事にや……

⑮有明の月もてあそぶいはまより光をちらすなみの花哉（暁月十九番・左持・長俊¹²⁹）

⑭「敦津の浦」は万葉以来詠まれる摂津国住吉の歌枕で、平安末期には「もしほ草しきつのうらのねざめには時雨にのみや袖はぬれける」（千載集・羈旅⁵²⁶・俊恵）、「恋をのみしきつのうらのあま人のこゑたてつべくおもほゆるかな」（林下集²⁰⁰）といった「敦津の浦」の「しき」あるいは「し」を掛詞とする詠歌が工夫された。当該為季歌は、

「暁月」題を得て、月光を氷に見立てる型を利用して「こほりしきつのうら」と表現したのである。「氷」を「敷く」ことそのものが大仰な表現だが、敦津の浦の波を一面に照らす月光という光景を設定することで違和感を消去している。「こほりしきつのうら」の表現はこれが初例で、後鳥羽院歌壇では良経が採用して「月かげやなみをむすばぬうす氷しきつのうらによする船人」（仙洞十人歌合⁵⁶）と詠じた（他に光経集⁵⁶⁵）。なお、「浪まにきゆる」は従来用例では、いずれも舟・島について用いていたものを、為季は有明の月が沈むのに用いている。月が波間に消えると、波間の氷も消えてなくなってしまう、その瞬間を表現しようとした試みは注意される。⑮「光をちらす」は長俊歌が初例で、岩間の浪によつて水に映る月が揺れる状態を「月もてあそぶ」と表現し、それによつて光がさまざまな方向に乱反射する様子を表現している。後に、千五百番歌合で源通光が「あさぢふやふきくるかぜをたよりにてひかりをちらす露の月かげ」（六百九十四番・右持¹³⁸⁷）と、風に散る露によつて光の散る様を詠じている。

右のように、旧風歌人たちによる詞の工夫が、新風の模倣を脱して新風歌人から注目される例も少ないながら当該

歌合には存するのである。

四 歌道家歌人たちの表現

——家隆・定家・保季・顕昭——

最後に、両歌道家の幾人かの歌人うち、俊成門下の家隆・定家、六条家の保季・顕昭の詠歌を見てみよう。まず、六百番歌合で先鋭な表現を行った家隆歌を挙げる。

⑬ 吉野山花は匂ひにこほれ落て袖にしられぬ峯の春かぜ (山花十四番・右勝28)

……右、風体はよろしきを、「余」情の過たるにや、浅心及がたく「ぞ」侍れど、袖にしられぬなどいへるすがた、猶よろしかるべし、勝とすべくや

⑭ 郭公まつ夜かさなる雲路より初音にかへる去年の古声 (初郭公十四番・右勝74)

……右歌、初音にかへるといへる心いとをかし、可為勝

⑮ ながむれば千里の秋も雲はれて月にこもれる有明の空 (暁月十四番・右負120)

……右歌、月にこもれりといへる、心あまりては聞ゆれど、左、歌合の歌といひつべし、勝に侍べし

⑯ うづもれて梢にかはるみやまちもまた跡たえぬ雪ぐれの空 (深雪十四番・右勝166)

……右歌、梢にかはるみ山路もといひて、又跡たえぬと云る心なをよろしく聞ゆ、右まさるにや侍らん

⑰ 「匂ひにこほれ落て」は、他に用例を見ない表現である。「こほれ落つ」は涙について言うのが普通で、白露に用いる例もあるが、家隆歌のように花が匂いとものにこほれ落ちるとの表現はいかにも新風といえるものである。判詞では「余」情の過たるにや、浅心及がたく」と述べ、意味の脈絡が取りづらい点について批判的であるが、第四句「袖にしられぬ」を挙げてその姿を評価して勝としている。「袖にしられぬ峯の春かぜ」の句は、良経の治承題百首詠「まどのゆきいけのこほりもきえずしてそでにしられぬはるのはつかぜ」(秋篠月清集401・立春)に学んだものと思われる。「はじめに」に述べたように、松野は、当該歌合の俊成判詞と跋文から「良経定家らの新風の行き過ぎへの

批判」を読み取ったが、⑩判詞からは、「新風の行き過ぎ」に対してただ批判しているわけではなく、新風表現にもさまざまのケースがあつてその適否を判断し、基本的には新風を推奨していることが窺われる。ただし、先掲④⑬等の「いりほが」に陥る危険性のある表現については批判しているということになるうか。⑪「初音にかへる」、⑫「月にこもれる」、⑬「梢にかはる」はともに家隆歌が初例で、その後も用例は希少な表現である。⑭については、判詞に「心あまりては聞ゆれど」と古今集業平評を引用して新風的特質を評価しているが、結局負としている。このように、家隆は、当該歌合においても六百番歌合におけると同様に先鋭的で問題を含む新風表現を試みていることが知られるのである。

ところが、それに比べて定家の表現は、六百番歌合詠と比べてかなり穏やかである。

②よし野山いくよへだて、桜花なを白雲の色にみゆらん（山花十一番・右持22）

……右もすがたよろしからざるにあらず、持とすべし

②かはらずもまち出る哉郭公月にほのめく去年の古声

建久六年民部卿経房家歌合の詠歌表現について

（初郭公十一番・右負68）

……右、かはらずもまちいでつる哉など、いへる、すがたよろしくは待れど、去年もことしも月にしもほのめきけん事もおほつかなくや

②は詞続きにおいては新風ともいえない表現である。②「月にほのめく」は判詞に批判するが、照る月を背景に郭公の一声がほのかに聞こえる映像が鮮やかである。仙洞句題五十首で宮内卿が「雲かかるをちの山田の葉末より月にほのめくはつかりの声」（172）と撰取しており、定家自身、当該歌合で唯一拾遺愚草に撰び入れた歌でもあつて、自信があつたのであろう。しかし、②にしても家隆の⑩のようにないかにも新風といった歌ではない。このように、定家歌には六百番歌合時の先鋭な新風表現が影を潜めており、家隆の詠風とは対照的である。理由は分からないが、俊成の指導があつたものであろうか。俊成門下といっても、定家と家隆とはその指導に差があることが推測されるのである。

次に、保季・顕昭の詠作を見てみたい。

重家男の有家は新風歌人といえる存在だが、同じ重家男保季も新風を模倣する姿勢が強い。前掲⑧は定家歌を学ん

だ表現であつた。次の②は下句がいかにも新風を学んだ表現である。

②あくるまで露のやどりやおしからん浅茅が末に残る

月かげ（暁月十八番・左勝127）

左歌、露のやどりやおしからんといひて、浅茅が末に残る月かげと云る、媛艶荊台の夢に入し姿にことならざるにや……

なお、保季は当該歌合が「和歌事跡の初め」とされる。⁽¹⁶⁾

ところで、顕昭に新風を摂取しようとする姿勢が見られて興味深い。

③雪ふればあしのうらばに波こしてなぎさ「も」わか

ぬなはのつぶらえ（深雪七番・右負・顕昭152）

……あしのうらばに浪こしてなどは優に待を、末句こそすこしおどろかれ侍れ、かゝる姿になりぬれば、初より一躰なるこそゆるす事に侍れ……

③上句は、雪が降ると荳の末葉に白波が越したように見えるというが、新古今集に入る秀能「ゆふづく夜しほみちくらしなには江のあしのわかばにこゆる白波」（春上26）や、千五百番歌合の後鳥羽院「うらちかきすゑのまつ山ゆきふれば冬よりうへを浪やこゆらん」（九百六十一番・左勝192）

といった歌に表現が近く、新古今新風といえる場面構成を取っている。俊成は判詞で、上句を取り上げて「優」と評しているが、それはこの表現によつて描写される情景の映像を評価したものであろうか。しかし、下句については批判し、「初より一躰なるこそゆるす事に侍れ」と述べるので、上句・下句が統一された一つの姿となつていないと指摘したことになる。俊成判詞には、上句から下句まで一首の姿を統一すべきとの指摘が多いことは、谷山茂による整理があるが、⁽¹⁷⁾③もその一例である。③においては、第五句「なわのつぶらえ」が風俗歌「難波振（なまぶり）」からの摂取で、上句とは異なつて古い姿である点を批判したものと考えられる。それにしても、前節の例も含めて当該歌合の旧風歌人詠が後鳥羽院歌壇における新風歌人の詠歌に影響を与えた可能性のある点は注目してよいであろう。もともと顕昭については、実作・歌論の両面で千五百番歌合の時点では新風へ傾斜が指摘されてきたが、建久年間のしかも六百番陳状を執筆したと見られる直後においてもその傾向の見られる点は注意されてよいであろう。⁽¹⁸⁾

おわりに

当該歌合にはさまざまな歌歴を持つ歌人が出詠しているが、俊成門下の歌人を含めて六百番歌合の出詠者十名、良経家女房百首に出詠する女流歌人（四名すべて該当か）が出詠し、時期的にも良経家歌壇の新風の影響を受けやすい状況にあった。その詠歌表現は風情主義的なものももちろん存するが、全体としては俊成門下の新風歌人だけでなく旧風歌人たちや六条家の顯昭・保季らまでもが新風表現の影響を受けているといえるのであり、あるいは新風を志しているときえいえよう。特に、旧風歌人たちが、良経家歌壇の詠歌を参照しながら新風表現を工夫している様子はつきりと窺うことができた。この点は、わずか十年後には竟宴を迎える新古今集の成立の前段階として、建久年間の当該歌合のような良経家以外の場をも視野に入れて考察する必要性を物語っている。また判者俊成は、すべての歌人たちの詠歌について、「いりほが」に陥りそうな表現については批判しながら、適切に新風へ導こうとしていることも見て取れた。俊成判詞については、「新風への行き

過ぎへの批判」が見られることを松野が指摘していたが（はじめに「参照」、⑬「雲にふしたる」の批判などたしかにそういう面も窺われるが、⑩「雲もまがはず」、⑪「雲になれたる」、⑫「花の雲しく」等の工夫を評価し、また家隆歌⑯を評価するなど、基本的には新風表現を推奨しようとしているのであり、批判するのは新風まがいの表現に限られるといつてよいであろう。

従来、跋文の「たゞよみもあげ、うちも詠たるに、えんにもおかしくも聞こゆるすかたのあるるべし」との言説のみが注目されがちであった当該歌合であるが、全体の詠歌の検討からは、良経家歌壇以外の催しでありながら、新古今集への一階梯として重要な意義を持っているといえるのである。

注

- （１）『後白河院時代歌人伝の研究』（笠間書院、二〇〇五年）第十八章「文治二年十月経房家歌合をめぐる」444・445頁参照。

- （２）「中世和歌の淵源——『無名抄』の再検討——」（『中世詩歌の

本質と連関」、竹林舎、二〇一二年）参照。

(3) 跋文の中の「おほかたは、歌はかならずしも絵のところのもの、いろ／＼ののかずをつくし、つくもつかさのたぐみのさま／＼きのみちをえりすへたる様にのみよむにはあらざる事なり。たゞよみもあげ、うちも詠たるに、えんにもおかしくも聞こゆるすかたのあるるべし。たとへば、在中将業平朝臣の、月やあらぬといひ、紀氏の貫「之」は、しづくに、こる山の井のなど云るやうによむべきなるべし」とある箇所。俊成歌論の核心の一つと目されている。

なお、当該歌合本文の引用は、松平文庫本により、私に濁点、句読を付した。松平文庫本の本文は、国文学研究資料館蔵マイクロ資料の複写により翻字した。校訂を施す場合は、校訂した文字を「」で示した。ただし、ミセケチ訂正及び傍書のある箇所において、本行本文と傍書が一致する場合は「」を付さずに本行本文のみを示した。

建久六年民部卿家歌合の伝本は、松野陽一が八本を掲げて「全て同一系統本であり、本文異同はほとんどないといつてよい」「本文的に最も善いと思われるのは、④彰考館乙本と⑤松平本であるようである」と指摘している（『藤原俊成の研究』笠間書院、一九七三年 470～476頁参照）。現在、松野が掲げた伝本以外に知られるのは、河野美術館蔵本と京都女子大学図書館蔵本の二本とともに小沢蘆庵本である。

稿者も伝本の精査には至っていないが、松野が指摘した彰考館乙本（歌合部類本。已・一二）と松平文庫蔵本（二三八・四六）の本文が比較的優れていることに異論はない。ただし、すべての伝本がいずれかの箇所を校訂しなければ使用に耐えない現状にある。

(4) 『藤原俊成の研究』470～476頁参照。

(5) 文治二年経房家歌合では、冒頭に「祝」題が据えてあることから何らかの慶賀が存したかと推定されるが、やはり具体的には不明である。

(6) 六条家と御子左家が激しく対立したとされる六百番歌合においても、結番はそうはなっていないことについてはかつて指摘した（拙著『藤原俊成 判詞と歌語の研究』第二章「四 六百番歌合の寂蓮と顕昭」、笠間書院、二〇〇六年）。

(7) 良経が八名の女房歌人に百首を詠ませた催しで、勅撰集等の詞書から、高松院右衛門佐、小侍従、八条院六条、殷富門院大輔、丹後については確実にメンバーであったと考えられる。久保田淳「高松院右衛門佐とその周辺」（『中世和歌史の研究』明治書院、一九九三年）493・494頁等参照。

(8) 重家集からの入集歌は、深雪九番・左歌・経家「ふる雪のちへにも、へに積みて白妙なりやみてぐらのしま」である。経家が父重家の詠歌から、いかにも第二句三句が深雪

題に相應しい歌を見出して提出したものであろう。

- (9) 『平成新修古筆資料集』第五集(田中登編著、思文閣出版、二〇一〇年)所収「藤原為家筆六半切公時集」による。

- (10) 文治二年経房家歌合の勅撰集入集状況については、拙著『藤原俊成 判詞と歌語の研究』(笠間書院、二〇〇六年)第三章注(3)(4) 104頁参照。

- (11) 山に草木がない意の「かぶろ」の用例は、漢詩では、「碧樹路深山不童」(新撰朗詠集546・源俊房、中右記部類紙背漢詩集にも)、和歌では、「いとほしやまだかぶろなるうなみどもやけ野にあまたつばなぬくなり」(夫木抄16748・信実)が目につく程度である。

- (12) 「色葉字類抄研究並びに索引」(風間書房、一九六四年)113頁参照。

- (13) 「鳩の杖」の用例は、以後「をとこ山はとの杖にもたづさひて猶さかのぼるしるしあらせよ」(正治初度百首596・鳥・通親)、「君がへんちとせの坂をまつひとのはとのつゑをばつくにぞ有りける」(家長日記76・俊成九十の賀・具親)等がある。

- (14) 無名抄本文は『歌論歌学集成 第七卷』(三弥井書店、二〇〇六年)に拠る。

- (15) 「やまたかみくもになれつ、すむ人はそれとわきてやはなをみるらん」(澄覚集39、山家花)。

建久六年民部卿経房家歌合の詠歌表現について

- (16) 井上宗雄『鎌倉時代歌人伝の研究』(風間書房、一九九七年) 45頁参照。

- (17) 日本古典文学大系『歌合集』(岩波書店)「建久四年六百番歌合(抄) 夏上二十四番判詞」上下かやうに言ひ出づる事も許すかたも侍りぬべし」についての補注四四で、「俊成が本番判詞で言おうとする真意は、古風なら古風に、近來の姿なら近來の姿に、純粹に徹する事を庶幾するという点にある」と指摘し、当該建久六年経房家歌合の例も含めて用例を整理する(535・536頁)。

- (18) 風俗歌「難波振」は、次の通りである。
難波のつぶら江の 春なれば 霞みて見ゆる 難波のつぶら江
つぶら江の夫や 春なれば 霞みて見ゆる 難波のつぶら江
(日本古典文学大系『古代歌謡集』 438頁)

- (19) 顕昭の御子左家新風に対する姿勢については、拙稿「顕昭の新風に対する認識と姿勢」(『中世文芸論稿』12、一九八九年三月)、同「顕昭の新風撰取——『千五百番歌合』判詞二例について——」(『中世文芸論稿』14、一九九一年三月)、同「中世歌人の心」(世界思想社、一九九二年、共著)第五章参照。

(本学教授)